

胎児にも水俣病？

松本熊大 助教授 近く解剖結果発表

水俣地方に発生している先天性の脳性小児マヒの子十八人（うち二人死亡）が水俣病ではないかという意見が旭大医学部の研究陣の間で強まり、来たる二十九日にはこの問題をめぐって水俣病審判会が開かれることになっているが、これに先立ち同医学部第二病棟の松本英世助教授は、昨年と今年死亡した脳性マヒの子ども二人の解剖結果を、二十五日の旭大医学会で発表する。それによると、

二例とも明らかに水俣病の症状を呈しており、これは母親の胎内にいたとき、母体の胎盤を通じて有機水銀が胎児へ移行して発病した胎児性水俣病と考えられる、としている。

解剖したのは昨年三月死亡した

二歳六カ月の女児と、今年九月死亡した六歳四カ月の女児。二例とも脳の病理所見は本質的には同じで、いずれも大脳、小脳細胞に従来の水俣病と全く同じ障害が現われていた。すなわち、大脳脳回が狭く、水俣病障害が特徴的に現われる後頭葉の烏野野などすべての皮質の神経細胞の構築が不整で細胞数も少ない。また大脳核、間脳の神経細胞の数も少なく、小脳の皮質深部に強い細胞障害が認められるなど、水俣病の脳所見と全く同じだった。おとなの水俣病患者と違ったところは特徴ある脳の発育、形成異常が認められたことである。

二児の母親はいずれも健康体だったが、同教室ではさきに行機

行して発病した胎児性水俣病と考
えられると議論が激しく、……
なる二歳児の父親は水俣病でな
くなり、六歳児の兄も水俣病にか
かっているという。

◇松本助教授の話 脳性小児マ
ヒはいろいろな原因から起こるの

で、他の十六例が全部胎児性水俣
病かと思いついてはなかなかに
えない。しかし私が解剖した二例
はたがに水俣病に間違いない。